

## 2. 蔵垣内遺跡第12次発掘調査報告

### 1. はじめに

今回の発掘調査は、主要地方道亀岡園部線の建設に伴い、平成20年度に京都府建設交通部の依頼を受けて実施したものである。主要地方道亀岡園部線の建設に伴う発掘調査としては、平成19年度に引き続き、今回が2年目にあたる。平成19年度の調査成果についてはすでに報告しているところである。<sup>(注1)</sup>

蔵垣内遺跡は、京都府亀岡市千歳町国分正田・内垣内・西垣内・藪ノ本ほかに所在する。蔵垣内遺跡では平成14年度から平成18年度にかけて、国営農地再編整備事業に伴う範囲内容確認調査ならびに発掘調査を実施しており、縄文時代から中世に至る大規模な複合遺跡であることが明らかになっている。また、遺跡の北西部には古墳時代後半から飛鳥時代中頃にかけて築造された国分古墳群が重複していることも明らかにされている。

発掘調査は、当調査研究センター調査第2課第1係長小池寛、調査第1課資料係長田代弘、調査第2課第3係調査員筒井崇史が担当した。調査期間は、平成20年11月4日から平成21年2月24日までである。調査面積は1,830m<sup>2</sup>である。本報告は田代・筒井が執筆し、各項の末尾に文責を記した。

調査期間中は、京都府教育委員会・亀岡市教育委員会・亀岡市千歳町自治会をはじめとする関係諸機関からご教示、ご協力をいただいた。また、発掘調査および整理作業には多くの調査補助員・整理員・作業員の方々に参加いただいた。<sup>(注2)</sup>

なお、調査に係る経費は、京都府建設交通部が全額負担した。

### 2. 遺跡の立地とこれまでの調査成果

蔵垣内遺跡の所在する亀岡市は、周囲を200~600m級の山地に囲まれた盆地地形を呈している。その中央を桂川が北西から南東に向かって流れ、京都盆地に至る。桂川



第1図 調査地位置図および周辺主要遺跡分布図  
(国土地理院 1/50,000 京都西北部)

の両岸には河川に沿って低位段丘が広がる。蔵垣内遺跡は桂川の東岸の低位段丘上に位置し、背後には牛松山の裾が迫る。桂川東岸地域は、ここ数年続いた国営農地再編整備事業に伴う発掘調査によって、多くの遺跡の内容が明らかになりつつあり、蔵垣内遺跡も例外ではない。以下では、蔵垣内遺跡の調査成果について概観する。

縄文時代では、遺跡の南部で早期の押型文土器が出土している。周辺では車塚遺跡で縄文時代後期の縄文土器と石器が多く出土した。弥生時代では、遺跡の南部で中期の溝や土器棺墓などが検出されている。溝は方形周溝墓の溝と考えられる。同時期の方形周溝墓としては池尻遺跡や時塚遺跡で検出されている。また、遺跡の北部では後期の竪穴式住居跡などが検出されている。古墳時代では、遺跡の中央部から南部にかけて、前期の竪穴式住居跡が多数検出された。しかし中期から後期にかけての集落の痕跡は認められず、後期末から飛鳥時代にかけての竪穴式住居跡が遺跡の南部を中心に検出されている。この集落に併行して、遺跡の北西部に国分古墳群が築造される。奈良時代になると、遺跡の中央部から南部にかけて掘立柱建物跡が多数検出されている。このうち、遺跡の南端に近い調査区では正方位の建物跡を検出している。中頃には遺跡に隣接する段丘縁辺部に丹波国分寺が造営されるが、それ以降の遺構・遺物の検出例は減少する。しかし、中世になると、遺跡内各所で掘立柱建物跡や土坑などが検出され、中世後期には丹波国分寺に関連する遺構なども検出された。

### 3. 調査の経過

調査対象地は、亀岡市千歳町国分地内を南北に縦断する幅8m、総延長1900mの範囲である。調査対象地周辺は、先述のように国営農地再編整備事業に伴って、大規模な発掘調査を実施しており、新設される主要地方道亀岡園部線はこの国営農地整備地を縦断するように計画された。

調査の実施に当たっては、便宜上、調査対象地を南から北へAからNまでの地区に分け、数回に分けて調査を行った地区については枝番号で調査区を細分した(第2図)。なお、調査前には、国営農地再編整備事業に伴う工事用道路として、1~1.5mの盛り土が行われていた。

平成19年度の調査はA・D・E・Gの各地区の調査を行い、縄文時代から奈良時代および中世の遺構・遺物を検出した。調査区の設定の関係上、D地区とE地区については平成20年度にも引き続き調査を実施することになった。

平成20年度は、D・E・H・Iの各地区の調査を実施した。このうち、I地区については北と南の2調査区に分けて実施した。調査は、平成20年11月4日にH地区の重機掘削から開始した。翌11月5日からは人力による精査、遺構の掘削、検出遺構の記録作業を開始した。H地区に引き続き、D2・E2地区の重機掘削を行った。重機掘削後、人力による精査と遺構掘削を行い、検出遺構の記録作業を行った。D2・E2地区については平成20年12月17日にラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を行った。その後、若干の補足の調査と記録作業を行った。I地区は、平成20年12月1日から北調査区の重機掘削を開始し、引き続き南調査区の重機掘削も行った。人力による作業はD2・E2地区の作業がおおむね終了した後に、着手した。I地区については平成

21年2月13日にラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を行った。また、調査終了間近の平成21年2月20日に関係者説明会を行い、平成20年2月24日にはすべての作業を終了した。

#### 4. 検出遺構

##### 1) D 2 地区(第3図右下)

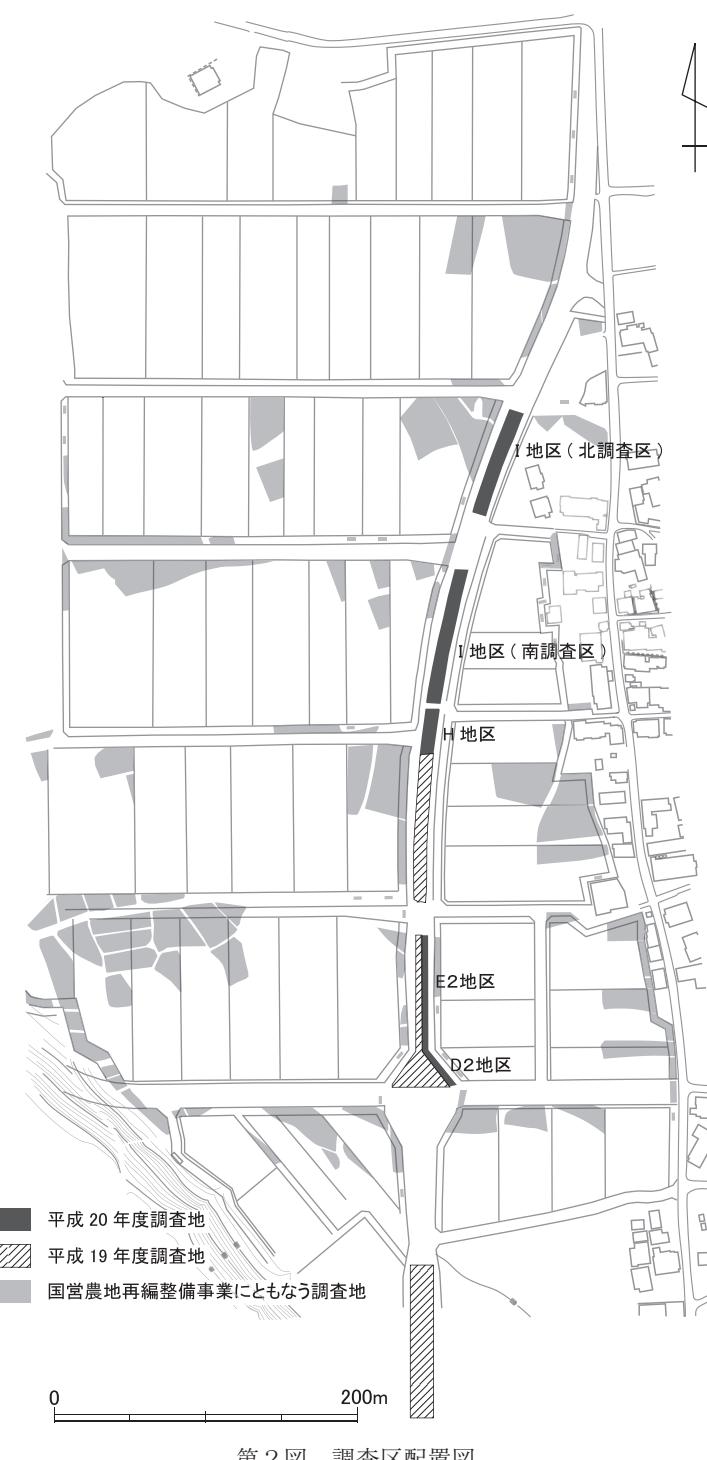
昨年度に調査を行ったD 1 地区の東側に設定した調査区である。昨年度調査分の残余の部分でもあり、幅は4mに限られる。調査区の全長は25mである。検出遺構としては、土坑や柱穴などがある。

土坑は5基を検出したが、調査範囲が限られたことから、全体の形状や遺構の性格が分かるものは少ない。土坑 S K168・169・170などから多数の土器が出土した(第6図7~17)。

柱穴は50基以上を検出した。柱穴には一辺が0.4~1.1m、深さ10~30cmの方形のものと、直径0.2~0.6m、深さ10~30cmの円形のものとがある。ただ、建物や柵としてまとまるものは確認できなかった。また、D 1 地区検出の柱穴と組み合う可能性のものもみられたが、建物などとしてまとまるものは認められなかった。柱穴 S P114・115・126・166などから土器が出土した(第6図1~6)。

また、D 2 地区の北半部には遺物包含層が明瞭に認められ、多数の土器が出土した(第6図18~39)。柱穴や土坑から出土する遺物は、飛鳥時代から奈良時代にかけてのものであるが、遺物包含層からは古墳時代や平安時代のものもみられる。

##### 2) E 2 地区(第3図左)



第2図 調査区配置図

D 2 地区と同様に、昨年度調査を行ったE 1 地区の東側に設定した調査区である。調査区の大きさは全長76m、幅4mである。検出した遺構としては、柱穴や土坑、溝などがある。ただ、調査

区が狭いことなどから建物としてのまとまりや、全容の不明確なものが多い。また、出土遺物が少ないといため、遺構は時期不明のものが多い。

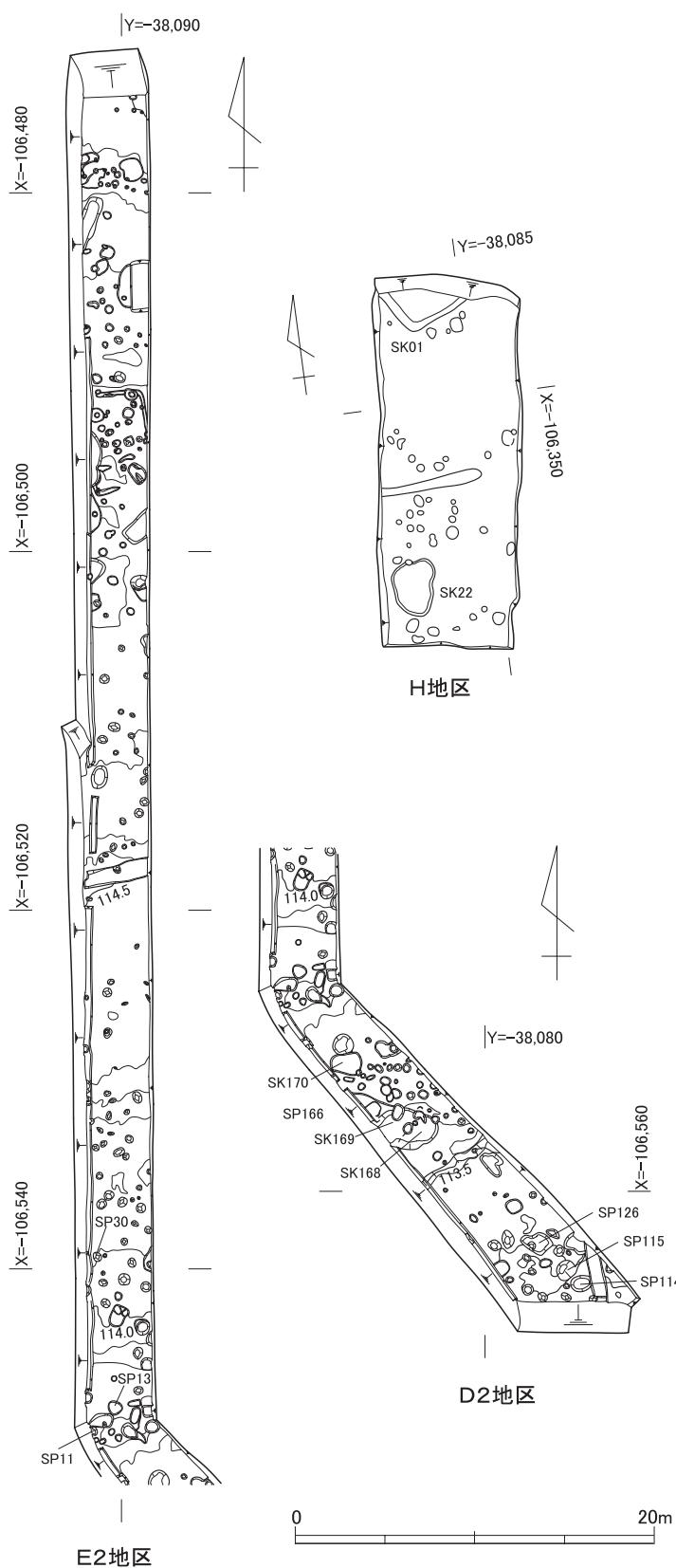
土坑は4基ほどを検出したが、遺構の性格などは不明である。また、出土遺物もほとんどない。

柱穴は小規模なものも含めて100基以上を検出したが、大半は円形の柱穴である。直径0.2~0.6m、深さ10~20cmのものが多い。遺物の出土した柱穴は少なく、柱穴SP 11・13・30などに限られる(第7図40~43)。

調査区南端付近では遺物包含層が厚く堆積しており、灰釉陶器や緑釉陶器を含む多数の遺物が出土した(第7図46~58)。弥生時代や古墳時代、奈良時代の遺物もあるが、平安時代の遺物が多い。また、縄文土器の破片も出土した(第7図44・45)。この遺物包含層はD 2 地区から続くものであり、昨年度の調査成果と合わせると、D 地区からE 地区の南端にかけて、飛鳥・奈良時代の遺構が広がっていたと判断される。また、縄文時代早期の遺物もほぼ同一地点で出土していることからその広がりが注意される。

### 3) H地区(第3図右上)

昨年度調査を行ったG 地区の北



第3図 D 2 · E 2 · H 地区遺構配置図

側に位置する。東西に横切る農道との交差点部分に当たるため、集中的に調査を実施し、I地区の重機掘削土で埋め戻した。調査区の大きさは全長20m、幅8mの調査区である。検出した遺構としては柱穴や土坑などがある。遺構の残存状況は良好とはいえず、出土した遺物も少ない(第7図59~65)。検出した遺構の時期はおおむね中世と思われるが、搅乱や遺構から奈良時代の須恵器や瓦が出土しており、付近に奈良時代の遺構が存在した可能性もある。

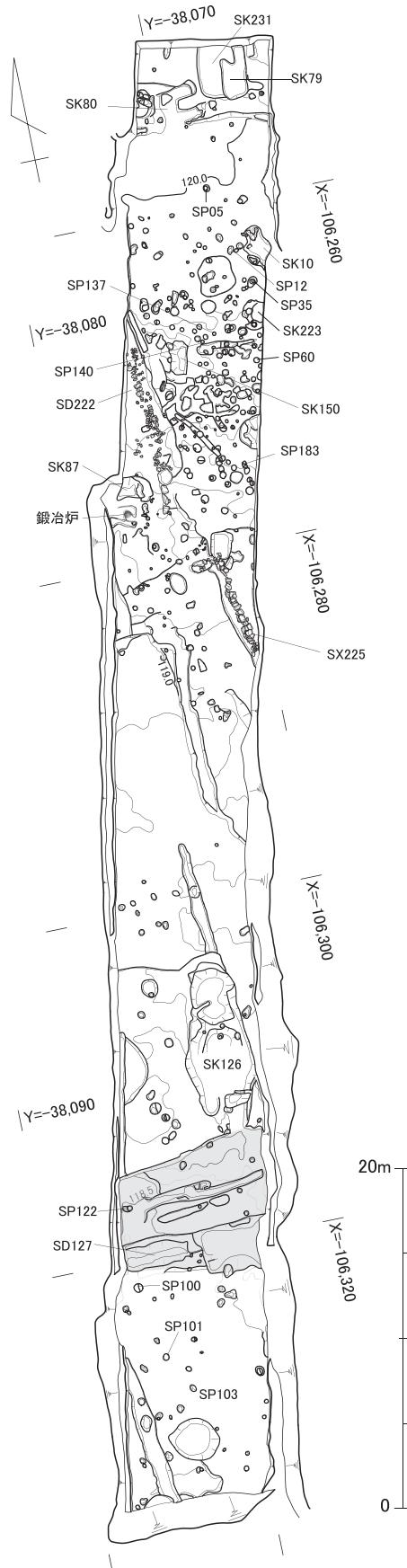
#### 4) I地区南調査区(第4図)

H地区の北側に設定した調査区である。両調査区の間に埋設管があるため、両者をつないで調査することはできなかった。調査区の大きさは全長88m、幅8mである。検出した遺構としては土坑や柱穴、溝、石垣状遺構、鍛冶炉などがある。

**石垣状遺構 S X225** 調査区の中央、やや北寄りを、おおむね南北方向に延びる列石で、北端で西に向かって直角に折れる。検出長は7.3mである。列石の高さは最大で0.4mである。一辺30~40cm程度の角礫を積み上げるが、乱雑であることから石垣そのものではなく、基礎部分か、他の用途の遺構と考えられる。礫を据えるための幅約1m、深さ15~30cm程度の溝を掘る。溝の北端は長さ2.2m、深さ1.5m程度の土坑状を呈する。据え付けのための溝から若干の遺物が出土した(第8図83~90)

**溝 S D222** 上記の石垣状遺構のほぼ延長上で検出した。方位はほぼ同一である。検出長7.5m、幅0.5m、深さ20cm前後である。溝に20~40cm程度の角礫が無造作に配されたような状況で検出した。溝からは比較的多数の遺物が出土した(第8図74~82)。

**溝 S D127** 調査区の南半で検出した調査区を東西に横切る溝である。調査前の水田畦畔とは異なる方向性を持ち、出土遺物などから中世段階の区画溝などになる可能性がある。なお、直上には厚さ20cm程度の礫層が厚く、またやや広い範囲に堆積していた(第4図網点の範囲)。溝や区画を礫で埋め立てたような例は、国営農地再編整



第4図 I地区(南調査区)遺構配置図

備事業に伴う第4次調査の際に検出例がある。<sup>(注3)</sup>

**柱穴群** 柱穴は200基近くを検出したが、大半は円形の柱穴である。直径0.2~0.5m、深さ15~30cmのものが多い。ただ、建物や柵としてまとまるものは確認できなかった。柱穴S P 05は単独の柱穴であるが、土師器皿・杯が埋納されたような状況で出土した。遺物の出土した柱穴としてはS P 05・12・35・60・100・101・103・122・137・140・183などがある(第8図93~105)。

**土坑群** 土坑は15基以上を検出したが、後述するSK 87・150を除いてその性格等は不明なものが多い。SK 87・150は、時期は明らかでないが、陥穴の可能性があるものとしてやや詳しく報告する。遺物の出土した土坑としてはSK 10・79・80・126・223・231などがある(第8図66~73・106~108)。

(筒井崇史)

**土坑SK 87** 東西に主軸をもつ長方形の土坑である。調査トレンチ西壁に接して部分的に検出した。長軸2.1m以上、短軸約1.6m、深さ0.5mである。壁面は、南壁、東壁を垂直に、北壁を斜めに整形している。長辺の一辺を斜めに作り、底面積を狭く掘り込む点が後述するSK 150と類似する。埋土は、黒色土を主体とし、上部に赤褐色土が混じる。

**土坑SK 150** 南北に主軸をもつ長方形の土坑である。長さ約2m、幅は北端と中央で約1m、南端で約0.8mである。深さは約45cmである。北壁・東壁・南壁は垂直に、西壁は斜めに整形されている。底面は、やや凹凸がある。中央で、直径約0.2m、深さ約6cmのピット1個を検出した。埋土は、黒色土を主体とし、一部に暗黄色粘質土が混じる。

**鍛冶炉跡** 直径約28cmの環状の焼土である。焼土の中央が椀状に丸く掘られており、底部に少量の鉄滓が遺存していた。炉底のみが遺存したものと考えられる。炉底の平面形は、長軸14cm、短軸12.6cmの橢円形で、深さは約7cmである。地山を掘り凹めて作られている。炉底滓は失われており、暗青灰色粘土で埋没していた。暗青灰色粘土の一部を採取して洗浄したが、微量の滓を認めたのみで、鍛造剝片や湯玉などを検出することはできなかった。

焼土は、炉底を中心として幅約7cmの幅で巡り、南側の一端が開口する「C」字形をしている。この焼土は、地山が被熱して赤色化したものである。したがって、炉壁は、円筒形で7cm以上の厚みをもつものであったことがわかる。開口部は、還元した灰色で、幅が約6cmである。この場所にフイゴ羽口が設置されていたと推測される。

(田代 弘)

## 5) I地区北調査区(第5図)

I地区南調査区の北側約40mに設定した調査区である。両調査区の間が農道との交差点に当たるため、平成21年度に調査を実施している。調査区の大きさは全長70m、幅8mである。検出した遺構としては土器溜まりや土坑、柱穴、溝などがある。

**土器溜まり** 調査区の北端で検出した土師器皿・杯・椀・甕、瓦器椀・皿などを中心に、輸入陶磁器などが大きく6か所程度のまとまりをもって検出された(A~F群、写真図版第6・7)。遺物のまとまりとしては、円形にまとまるもの(C群)、直線状に並ぶもの(A・B群)、広い範囲

に土器が集中するもの(D群)などがある。いずれの土器溜まりも掘形を確認することができなかったことから、屋外に土器をまとめておいたのではないかと推定される。また、土器の周辺に関連する建物などが存在する可能性も考えられたが、柱穴の数が多く、抽出することはできなかった。さらに、これらの土器群を取り上げた後もその下層から多数の柱穴が検出された。

調査中に認識したまとまりが、何らかの行為の1単位であるかどうかは明らかにできなかった。しかし、出土状況から一括性の高い一群であることは明らかで、可能な限り図示し報告することとした(第9図120～第11図243)。時期としては中世前半、11世紀後半～12世紀代と考えられる。

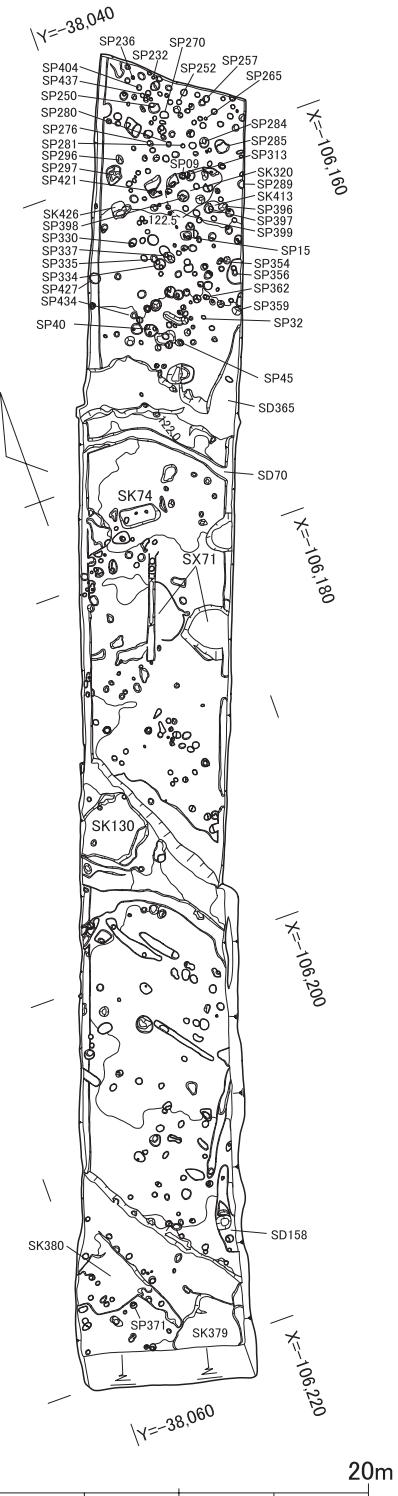
**溝S D365** 調査区の北部、トレーナー東壁に接して部分的に検出した。水田の造成に伴って南側は大きく削られているようである。検出長4.5m、幅1.5m以上、深さ0.3m前後を測る。古墳時代の須恵器高杯が出土しており(第13図336)、国分古墳群を構成した古墳の周溝の可能性もあるが、今回の調査では古墳の徵候を認められなかった。

**柱穴群** 柱穴は350基以上を検出したが、大半は円形の柱穴である。直径0.2～0.5m、深さ10～20cmのものが多い。ただ、建物や柵としてまとまるものは確認できなかった。遺物の出土した柱穴としては、柱穴 S P 09・15・32・40・45・232・236・250・252・257・265・270・276・280・281・284・285・289・296・297・313・330・334・335・337・356・359・362・371・396・397・398・399・404・421・427・434・437・354などがある(第12図244～第13図325)。

**土坑群** 土坑は10基以上を検出したが、後述する S K 74 を除いてその性格等は不明なものが多いた。SK 74は、時期は明らかでないが、陥穴の可能性があるものである。遺物の出土した土坑としては SK 130・320・379・380・413・426などがある(第13図326～335・340・341・343～346)。

(筒井崇史)

**土坑 S K 74** 南北主軸の隅丸方形の土坑である。規模は、長軸約2.1m、短軸約0.96m、深さ約0.46mである。壁面、底面は丁寧に成形している。底面は平坦に作られ、直径5～10cm、深さ



10cm前後のピットが複数認められた。杭状の逆茂木の痕跡とみられる。埋土は、黒色土が主体であり、一部に黄色土ブロックが少量みとめられる。

(田代 弘)

## 5. 出土遺物

### 1) 土器・瓦

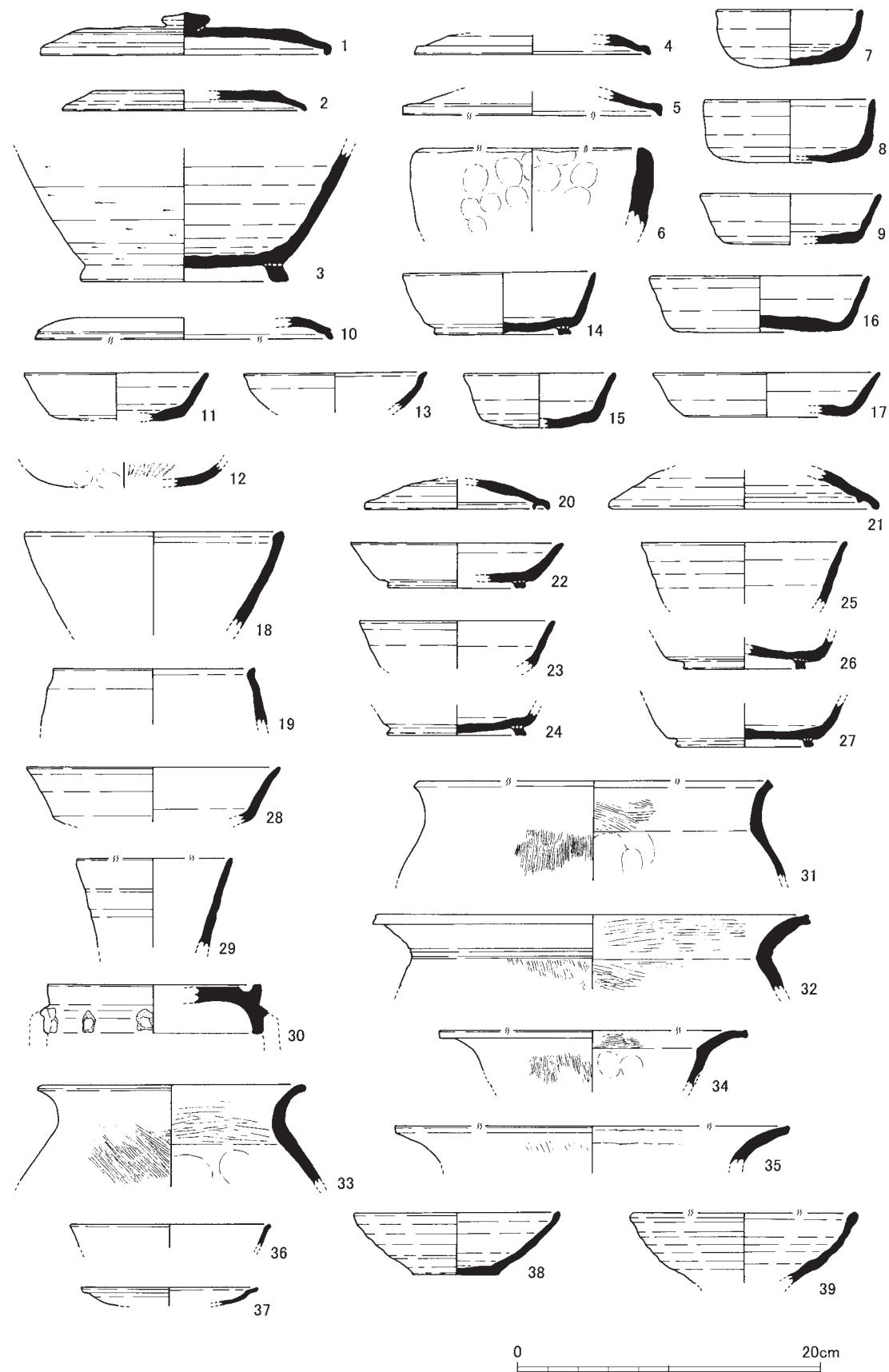
(1) D-2 地区(第6図1~39) 1は柱穴S P 126出土の須恵器杯B蓋である。<sup>(注4)</sup> 2・3はS P 115出土の須恵器杯B蓋と壺の底部である。4・5はS P 166出土の須恵器杯B蓋の口縁部である。6はS P 144出土の製塙土器である。7は土坑S K 170出土の須恵器杯Gである。8・9はS K 171出土の須恵器杯Gと杯Aである。10~12はS K 168から出土した。10は須恵器杯B蓋、11は須恵器杯Aである。12は土師器杯で、斜放射暗文がみられる。13~17はS K 169から出土した。13は土師器杯である。14~17は須恵器で、14は杯B、15は杯Gもしくは杯A、16~17は杯Aである。

18~39は遺物包含層から出土したものである。18は土師器壺の口縁と思われ、口縁端部内面が肥厚する。19は土師器鉢であろうか。18・19は古墳時代のものと思われる。20~30は須恵器である。20・21は口縁部内面にかえりを有する杯B蓋である。どちらも飛鳥時代のものである。22~28は杯もしくは杯Bである。いずれも奈良時代のものと思われる。29は提瓶もしくは長頸壺の口縁部と思われる。古墳時代後期ないし飛鳥時代のものであろう。30は蹄脚円面硯の破片である。蹄脚はいずれも剥離して残存しない。奈良時代のものである。31~35は土師器で、31~33は甕、34・35は鍋である。いずれも飛鳥~奈良時代のものと思われる。36は緑釉陶器杯ないし椀の破片である。37は「て」字状口縁を呈する土師器皿である。38・39は須恵器杯ないし椀である。36~39は平安時代のものである。

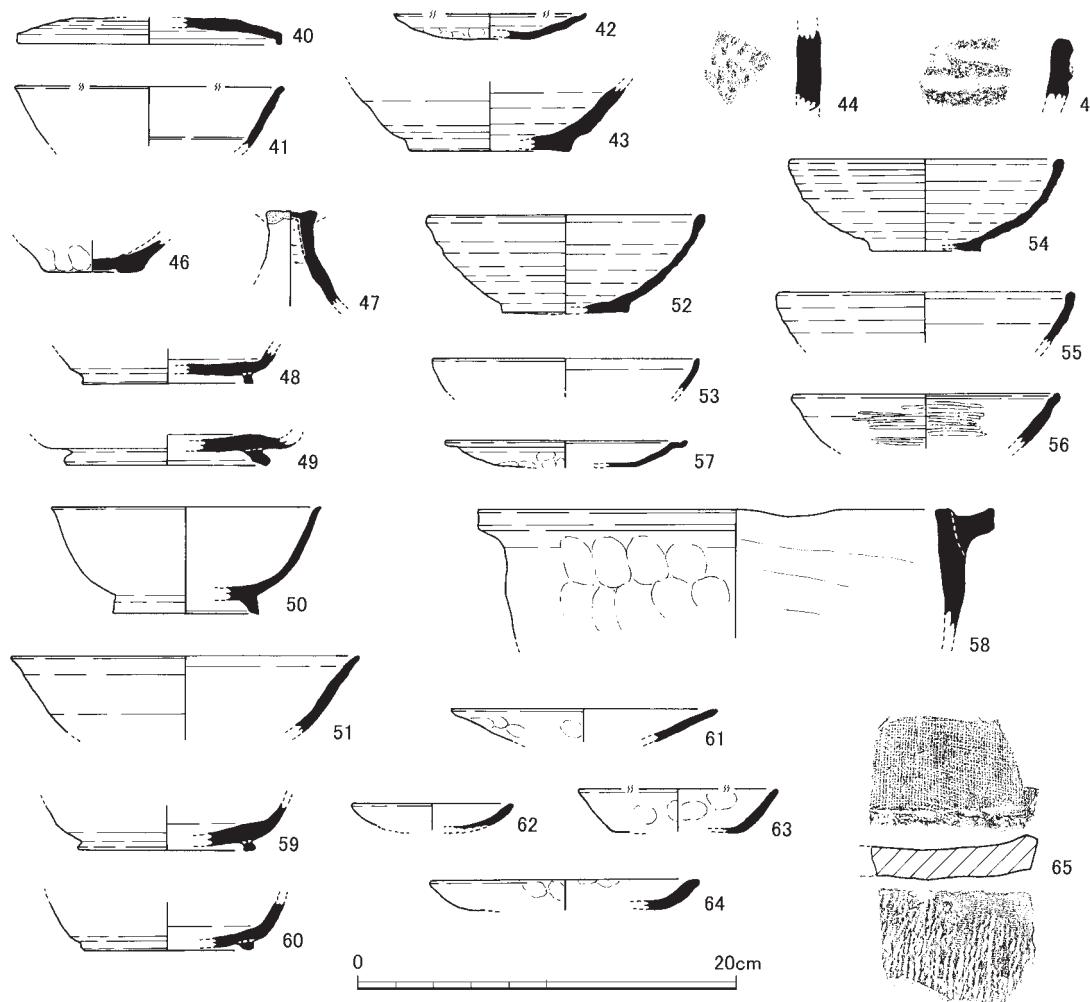
(2) E-2 地区(第7図40~58) 40は柱穴S P 13出土の須恵器杯B蓋である。41はS P 30出土の緑釉陶器椀の破片である。42・43はS P 11出土で、42は土師器皿、43は須恵器椀である。44~58は遺物包含層出土のものである。44・45は縄文時代早期の押型文土器の破片である。46は弥生土器甕の底部、47は古墳ないし飛鳥時代の須恵器高杯脚部と思われる。48・49は須恵器杯Bの底部で、奈良時代のものである。50は灰釉陶器椀、51は緑釉陶器椀、52~55は須恵器椀、56は黒色土器椀、57は土師器皿、58は土師器羽釜である。いずれも平安時代のものと思われる。

(3) H地区(第7図59~65) 59・60は須恵器杯Bの底部であるが、中世以降の遺構に混入して出土した。61~63は土坑S K 01出土の土師器皿もしくは杯である。64はS K 22出土の土師器皿である。65は平瓦であるが、中世以降の遺構に混入して出土した。凸面に縄タタキ痕跡、凹面に布目がみられる。奈良時代のものであろう。

(4) I地区南調査区(第8図66~119) 66は土坑S K 79出土の土師器皿である。67・68はS K 80から出土したもので、67は土師器皿、68は白磁の底部である。69・72・73はS K 10から出土したもので、69は土師器皿、72は瓦質土器の鉢、73は青磁椀である。70はS K 231出土の土師器皿である。71はS K 223出土の青磁椀である。74~82は溝S D 222から出土した。74~76は土師器皿ないし杯、77~79は土師器皿、80は青磁椀、81は須恵器甕である。82は古瀬戸の火鉢であろうか。



第6図 D2地区出土遺物実測図



第7図 E2・H地区出土遺物実測図

83～90は石垣状遺構S X 225出土である。83～88は土師器皿、89は須恵器鉢、90は土師器甕である。

91・92は溝S D 127出土で、91は土師器皿、92は備前焼摺り鉢である。

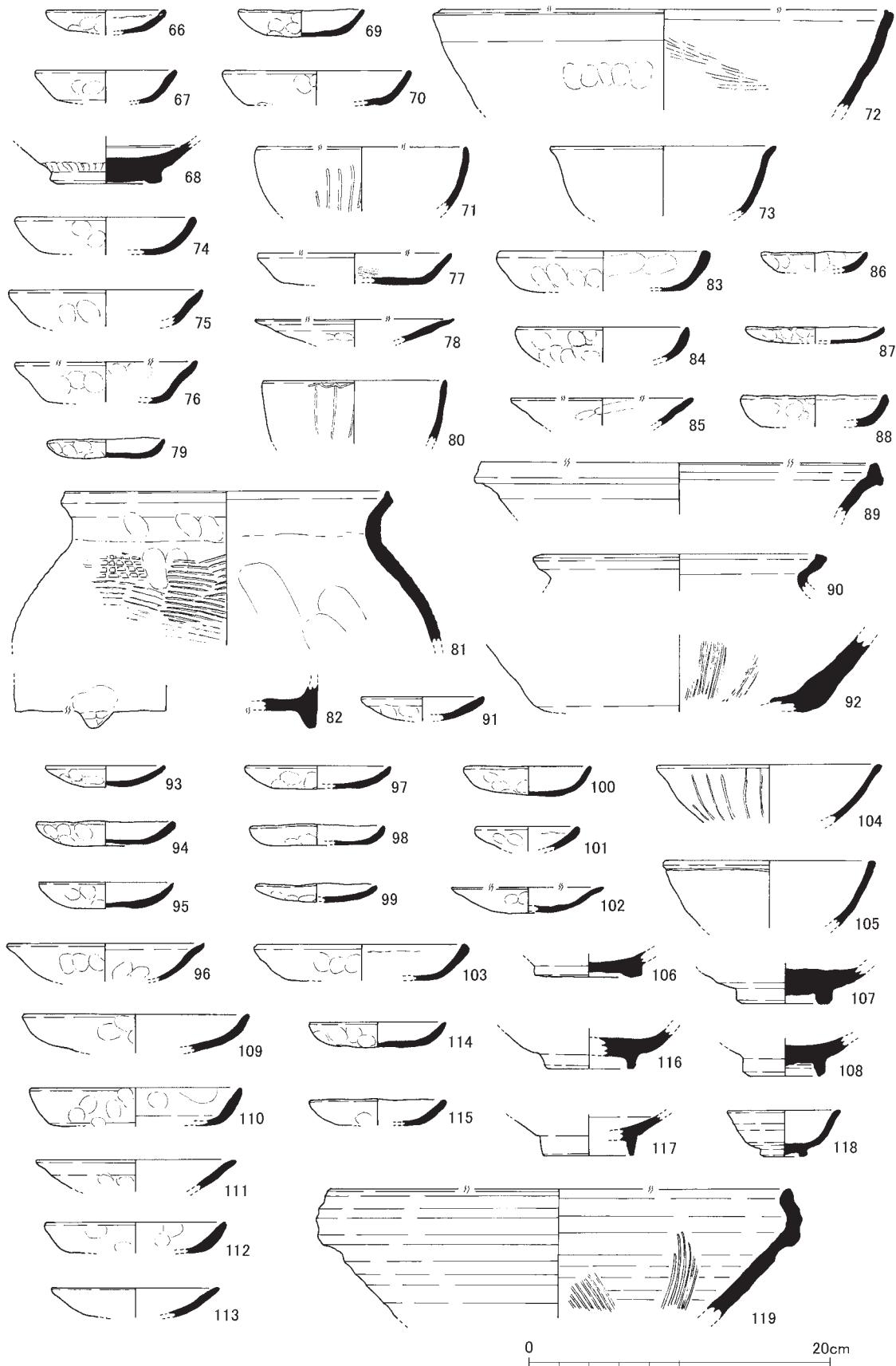
93～103は土師器皿ないし杯である。93～96は柱穴S P 05、97はS P 12出土、98はS P 35、99はS P 60、100はS P 122、101はS P 140、102はS P 137、103はS P 183出土である。104はS P 101出土の青磁碗、105はS P 103出土の青磁碗である。106～108はS K 126の礫層から出土したもので、106は白磁碗の底部、107・108は青磁碗の底部である。

109～119は遺物包含層出土のものである。109～115は土師器皿、116は青磁碗の底部、117は白磁碗の底部、118は小型の白磁碗である。119は備前焼摺り鉢である。

以上のI地区(南調査区)で出土した土器類はおおむね中世後半(15～16世紀)と思われる。

(5) I地区北調査区(第9図120～第14図392) 120～141は土器溜まりA群から出土したものである。120・121は大型の土師器皿である。122～135は土師器皿で、口縁部が「て」字状を呈するもの、丸く収めるもの、外反気味を呈するものなどがある。136～140は瓦器碗である。141は山茶碗の底部である。

142～147は土器溜まりB群から出土したものである。142・143は土師器皿である。144・145は



第8図 I地区(南調査区)出土遺物実測図

瓦器碗である。146・147は瓦器皿である。

148～190は土器溜まりC群から出土したものである。148～152は土師器碗である。いずれも回転台を使用したもので、148は底部外面に糸切り痕が残る。153～155は大型の土師器皿である。156～181は小型の土師器皿である。156～171は口縁部が「て」字状ないし、その退化形態を呈し、端部をつまみ上げ気味にするものが多い。175～179は回転台を使用した皿で、底部外面に糸切り痕が残る。平底に斜め上外方に延びる口縁部からなる。180・181は平高台状の底部を有する回転台成形の皿で、底部外面に糸切り痕が残る。182～185は瓦器碗である。いずれも口縁端部内面に沈線を有する。183はやや内湾度の強い個体である。186・187は瓦器皿である。188は白磁碗である。189は土師器甕、190は土師器鍋である。189は不明であるが、190は奈良時代のものである可能性が高い。

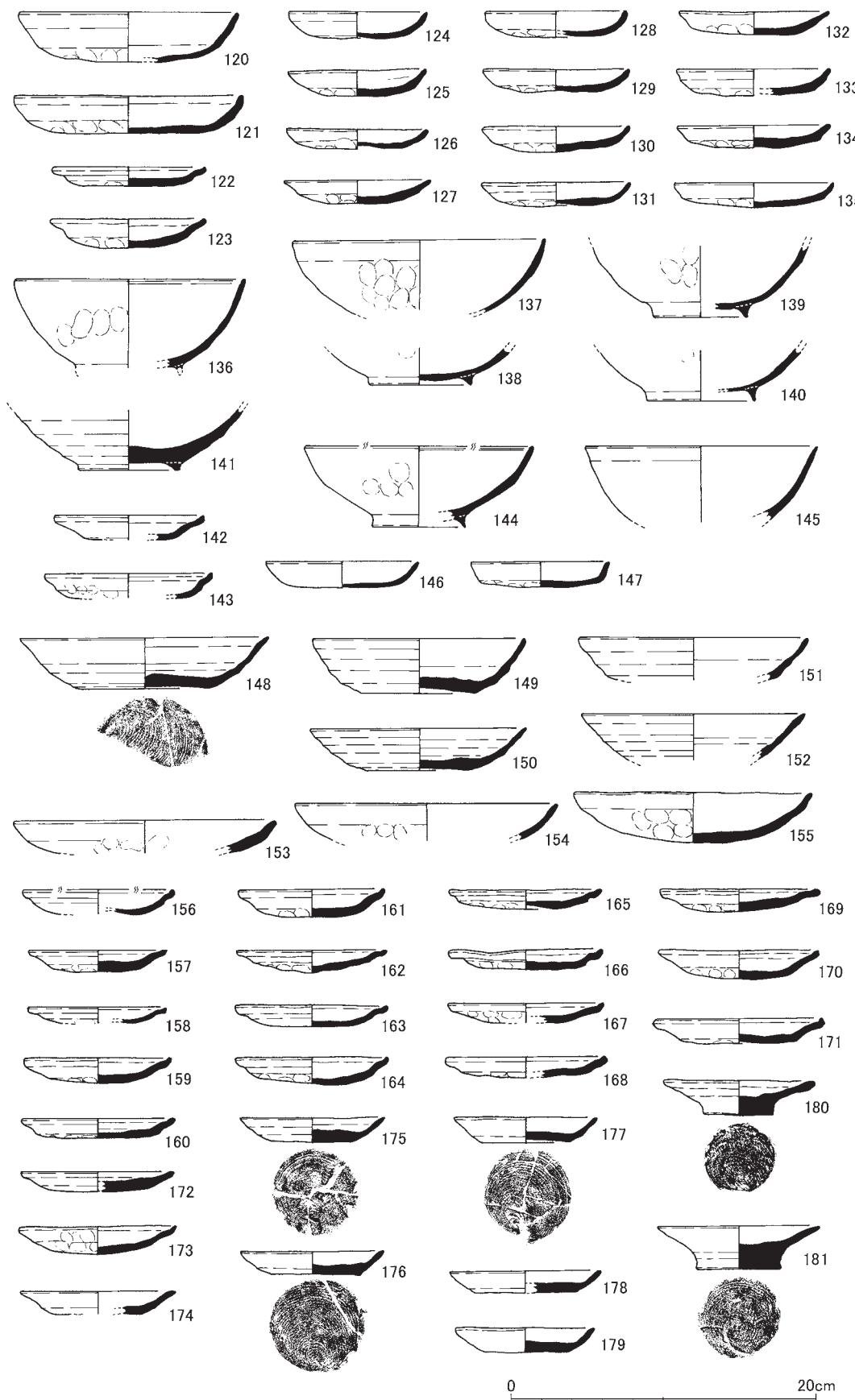
191～219は土器溜まりD群から出土したものである。191・193～195は遺存状態の良好なものは少ないが、回転台を使用した土師器碗である。193～195は底部外面に糸切り痕が残る。192は土師器の杯であろうか。196・197は大型の土師器皿である。198・199は足高の高台を有する土師器の杯ないし皿である。200～210は小型の土師器皿である。200～204は口縁部が「て」字状ないしその退化形態を呈し、端部をつまみ上げ気味にするものが多い。207～210は回転台を使用した皿で、平底に斜め上外方に延びる口縁部からなる。底部外面に糸切り痕が残る。211～218は瓦器碗である。211は底部内面に暗文を施す。211～214・216は口縁端部内面に沈線を1条施す。218は小型の瓦器碗である。219は瓦器皿である。

224～243は土器溜まりE群から出土したものである。224・225は回転台成形の土師器碗である。底部外面に糸切り痕が残る。226は土師器杯ないし皿、227は大型の土師器皿である。228～239は小型の土師器皿である。228～232は口縁部が「て」字状ないしその退化形態を呈し、端部をつまみ上げ気味にするものが多い。233・234は手づくねの皿である。235～239は回転台を使用した皿で、底部外面に糸切り痕が残る。平底に斜め上外方に延びる口縁部からなる。240・241は平高台状の底部を有する回転台成形の皿で、底部外面に糸切り痕が残る。242・243は瓦器碗である。ともに口縁端部内面に沈線を施し、242は底部内面に格子状の暗文を施す。

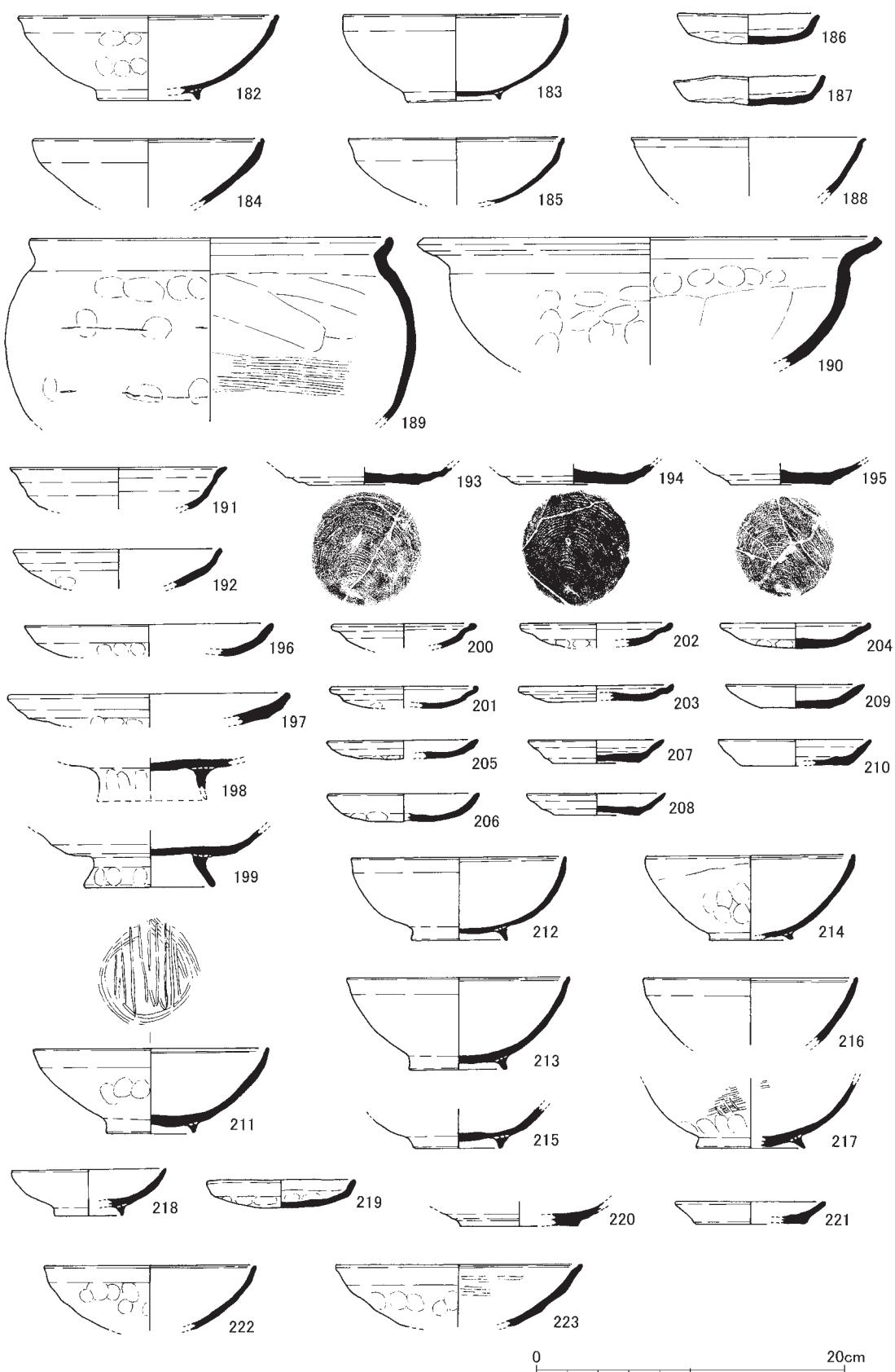
220～223は土器溜まりF群から出土したものである。220は土師器碗である。221は土師器皿である。222・223は瓦器碗である。

以上の土器溜まり出土土器はおおむね中世前半(11世紀後半～12世紀代)と思われる。

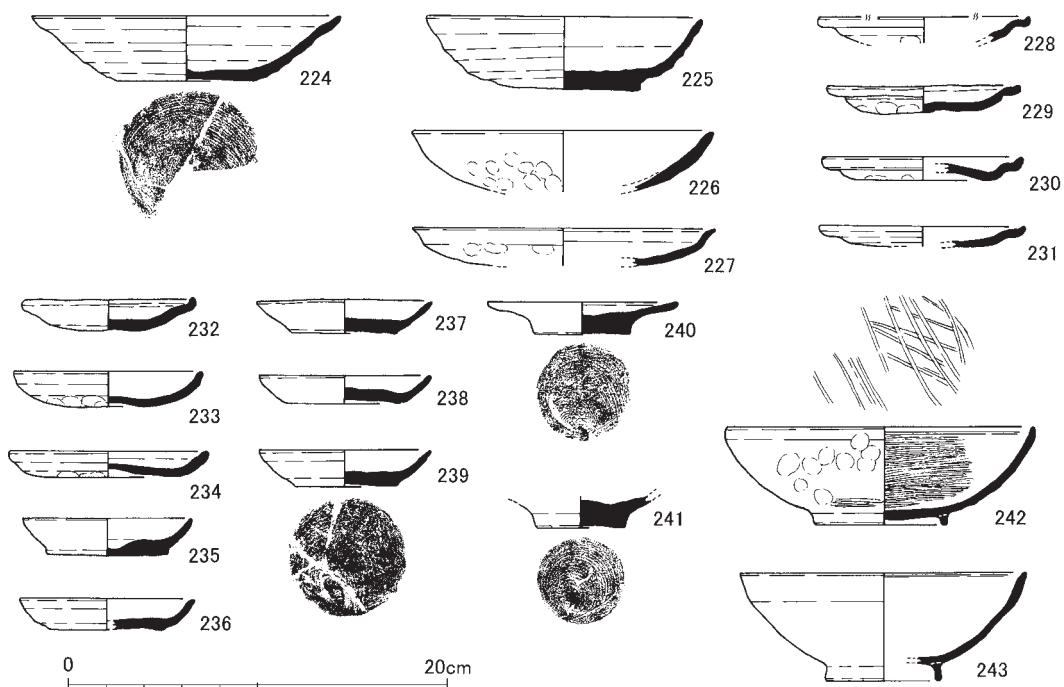
244は柱穴S P 09出土の瓦器碗である。245はS P 32出土の回転台成形の土師器碗の底部である。246・247はS P 40出土の土師器皿である。248はS P 45出土の土師器皿である。249はS P 15出土の大型の土師器皿である。250はS P 236出土の瓦器碗の底部である。251はS P 252出土の瓦器碗である。252はS P 276出土の瓦器碗である。253・254はS P 270出土の土師器皿で、253は手づくね、254は回転台使用である。255・256はS P 285出土の土師器皿である。257はS P 232出土の土師器皿である。258はS P 250出土の土師器皿である。259～261・265・266はS P 257出土の土師器皿である。262はS P 296出土の土師器皿である。263・264はS P 265から出土したもので、263



第9図 I地区(北調査区)出土遺物実測図(1)

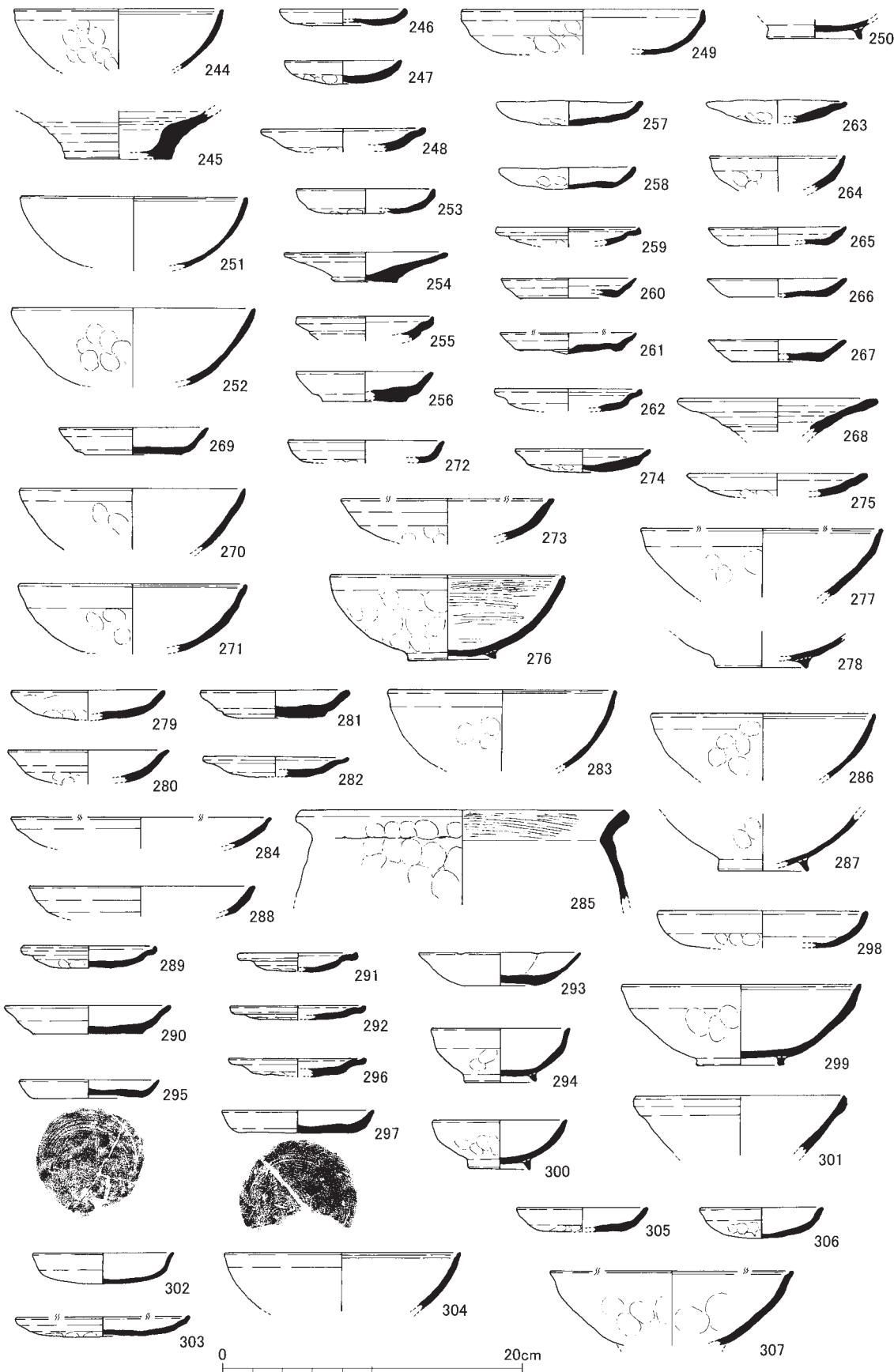


第10図 I地区(北調査区)出土遺物実測図(2)

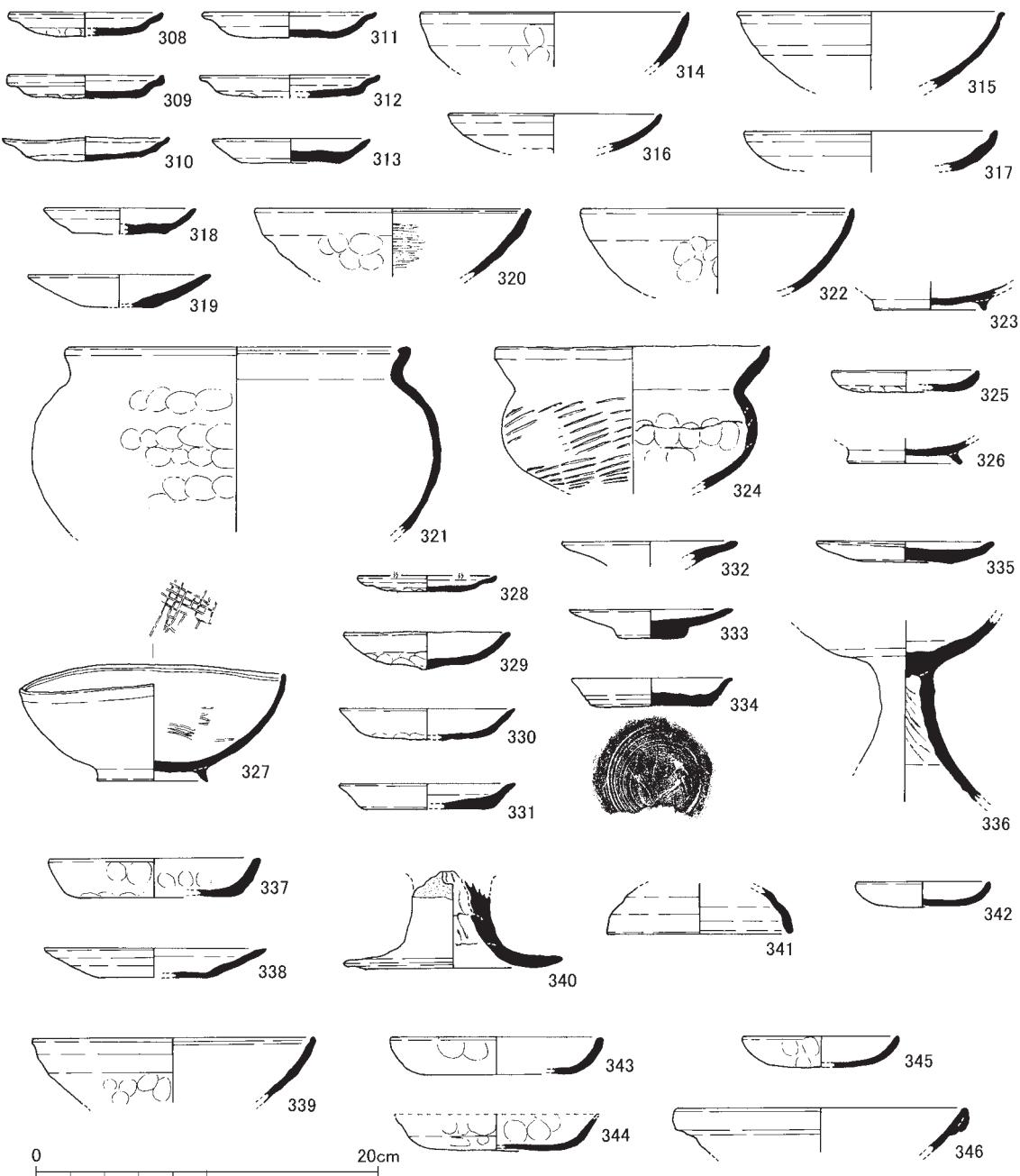


第11図 I地区(北調査区)出土遺物実測図(3)

は土師器皿、264は小型の瓦器碗である。267はS P 284出土の土師器皿である。268は回転台使用の土師器杯である。269～271はS P 289から出土したもので、269は土師器皿、270・271は瓦器碗である。272・273はS P 280出土の土師器杯ないし皿である。274～278はS P 297から出土したもので、274・275は土師器皿、276～278は瓦器碗である。279・280はS P 313出土の土師器皿である。281はS P 281出土の土師器皿である。282・283はS P 334から出土のもので、282は土師器皿、283は瓦器碗である。284はS P 335出土の土師器皿である。285はS P 330出土の土師器甕である。286・287はS P 337出土の瓦器碗である。288・289はS P 362出土の土師器皿である。290はS P 359出土の土師器皿である。291～293はS P 356から出土したもので、291・292は土師器皿、293は白磁皿である。294はS P 396出土の小型の瓦器碗である。295～301はS P 397出土のものである。295・297は回転台成形の土師器皿である。296は「て」字状口縁を呈する土師器皿である。298は大型の土師器皿である。299は瓦器碗である。300は小型の瓦器碗である。301は白磁碗である。302～304はS P 399から出土したもので、302は瓦器皿、303は土師器皿、304は瓦器碗である。305～307はS P 404から出土したもので、305・306は土師器皿、307は瓦器碗である。308～316はS P 398から出土したものである。308～313は土師器皿、314は瓦器碗、315は白磁碗、316は白磁皿である。317はS P 427出土の大型の土師器皿である。318はS P 421出土の土師器皿である。319～321はS P 434出土のものである。319は土師器杯、320は瓦器碗、321は土師器甕である。322・323はS P 437出土の瓦器碗である。324はS P 354から出土した弥生土器鉢である。外面にタタキ調整を施す。周辺に弥生時代の遺構が広がっていた可能性を示す。325はS P 276出土の土師器皿である。339はS P 371出土の瓦器碗である。以上の柱穴出土土器はおおむね中世前半頃(11



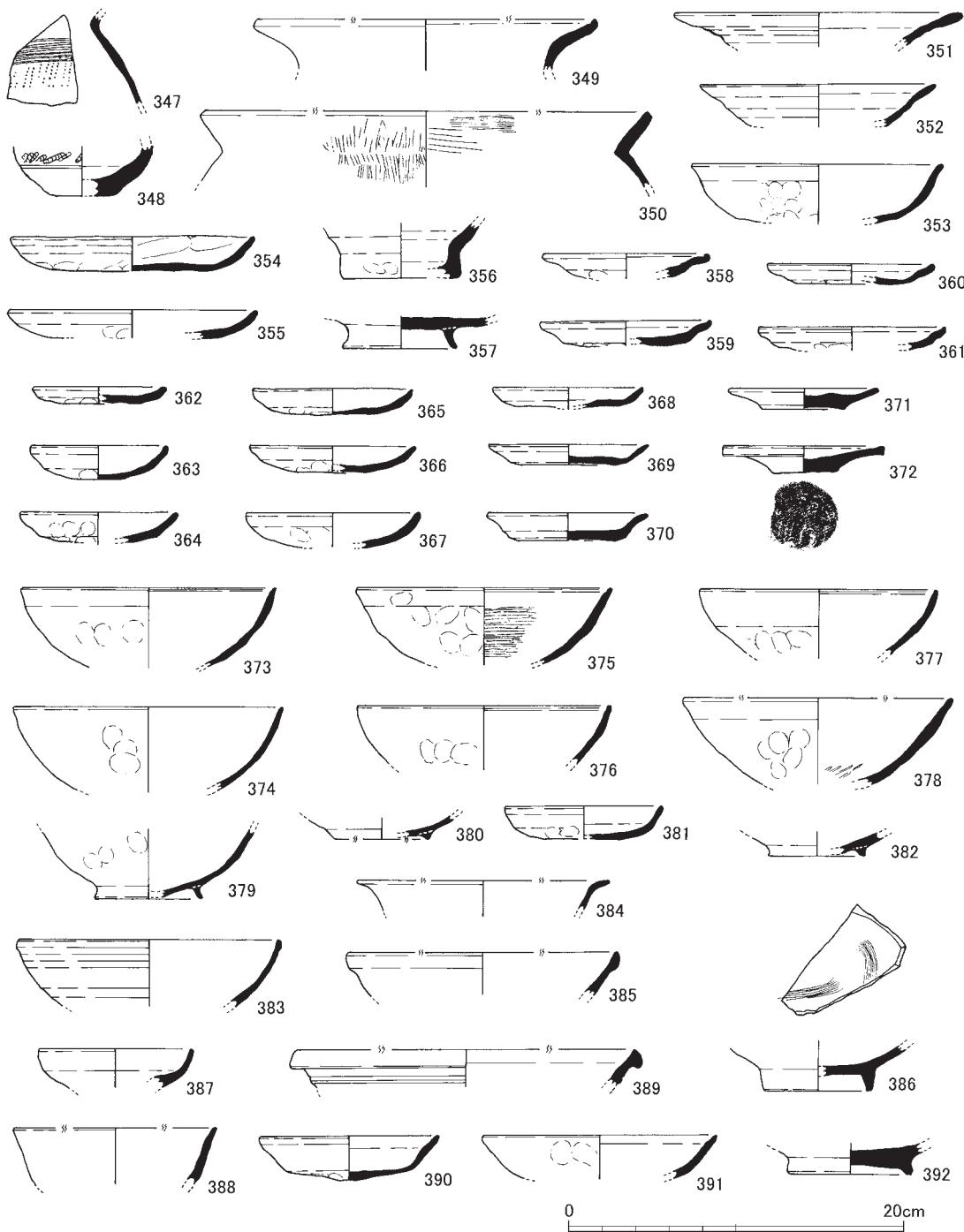
第12図 I地区(北調査区)出土遺物実測図(4)



第13図 I地区(北調査区)出土遺物実測図(5)

世紀後半～12世紀代)と思われる。

326は土坑S K413出土の瓦器椀の底部である。327はSK320出土の瓦器椀である。底部内面に格子状の暗文を施す。328～335はSK426から出土したものである。いずれも土師器皿である。333～335は成形に回転台を使用している。336は溝S D365から出土した須恵器高杯の杯部から脚部にかけての部分である。おそらく古墳時代後期頃の高杯と考えられる。337は溝S D70から出土した土師器皿である。338は落ち込みS X71出土の土師器皿である。340・341はSK130から出土したもので、340は土師器高杯の脚部、341は須恵器杯H蓋である。342は溝S D158出土の土師器皿である。343・344はSK379出土の土師器皿である。345・346はSK380から出土したもので、



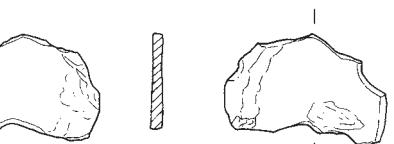
第14図 I地区(北調査区)出土遺物実測図(6)

345は土師器皿、346は白磁碗である。

347～392は遺物包含層から出土したものである。このうち、347～386は溝S D701よりも北東側で出土したものである。347は弥生土器甕ないし壺の肩部の破片で、外面に櫛描き文7条と列点文を施す。348は須恵器の壺の体部片と思われる。体部中位に列点文とその直下に沈線を1条施す。349・350は土師器甕である。奈良時代を前後する時期のものであろうか。351～353は回転台を使用した土師器の杯ないし碗である。354・355は大型の土師器皿である。356は底部中央が

大きく凹む土師器杯と思われる。357はやや足高気味の高台を有する土師器の杯か皿である。358～372は小型の土師器皿である。358～361は口縁部が「て」字状を呈する。369～372は回転台を使用したもので、372は口縁端部が面をなす。373～380は瓦器椀である。381は瓦器皿である。382は黒色土器椀の底部と思われる。383～386は白磁椀である。383・385は口縁部外面が玉縁状を呈し、384は大きく外反する。386は削り出し高台である。

387～392は溝S D70よりも南西側、土坑S K130よりも北東側で出土したものである。387は須恵器高杯杯部と思われ、国分古墳群に伴うものであろうか。388は須恵器杯である。389は須恵器壺または甕であろう。外面に沈線が2条めぐる。390・391は土師器杯である。392は山茶碗の底部であろう。



第15図 鉄製品・石器実測図

(筒井崇史)

## 2) 鉄製品

鉄磬(第15図393)は、D地区南端の遺物包含層中から出土した。左右均等の山形で、肩間8.2cm、絃が7.8cm、博が4.2cm、厚さ5mmの小形の鉄製品である。首稜、頸縁、足縁、脛縁など磬の特徴が表現されている。しかし、首縁、肩縁をゆるやかに凹ませて作り、頸縁を突出させる点、側縁・足縁をゆるやかに外湾させ、直線的に作る点、銛を明瞭に作り出さない点など簡素な作りであり、平安時代の鋳造銅製品にみる特徴とは異なる点が多い。図右側の外縁が裏面に比べてわずかに狭いように見える。表裏があるようであるが、器面に撞座、文様などは認められない。素文片面鉄磬である。紐の有無、形状については現状では明らかではない。突出した頸縁に孔を開け、紐とした可能性を考えておきたい。京都府内では、京都市京北町周山廃寺<sup>(注5)</sup>、舞鶴市上安久遺跡<sup>(注6)</sup>、綾部市木寺北遺跡<sup>(注7)</sup>で出土している。

## 3) 石器類

楔形石器(第15図394)は、I地区(北調査区)の柱穴S P398から出土した。鉄滓が認められたため、土壤採取をして水洗選別を行ったところ、当該遺物を検出した。縦長剥片を横位にして、両極打法により整形したものである。上下両端には階段状剥離が連続して用いられる。b面には両極打法に伴う裁断面がみられる。c面には、バルブが残る。長さ3.9cm、横長1.9cm、厚さ0.6cmを測る。チャート製である。

(田代 弘)

## 6. まとめ

今回の調査では、これまでの国営農地再編整備事業や本事業に伴う発掘調査によって明らかになっている成果に加えて、新たな知見をいくつか得ることができた。今回の調査で明らかになっ

た点や充実した点について、以下の列記する。

①D2地区北半からE2地区南端にかけて、奈良時代の土器とともに平安時代の遺物を多数含む遺物包含層を確認した。また、鉄磬も同じ遺物包含層から出土した。蔵垣内遺跡では平安時代の様相が不明確であることから、周辺における土地利用の一端を示すものと考えられる。

②I地区北調査区の北端で、中世の土器溜まりを検出した。検出状況から屋外に多数の土器を配したものと思われるが、どのような行為が行われたのかは不明である。例えば地鎮などの行為が考えられるが、詳細は今後の類例の増加を待ちたい。

③I地区南調査区では中世後半の土器が多数出土した。調査区の北西側で、蔵垣内遺跡第4次調査の際に丹波国分寺の子院に関連する遺構・遺物が検出されており、一連の遺構群である可能性がある。

(筒井崇史)

注1　岡崎研一「蔵垣内遺跡第11次発掘調査報告」(『京都府遺跡調査報告集』第133冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2009

注2　調査補助員：天池佐栄子・安井蓉子

整理員：中島恵美子・松下道子・井上聰・茶園矢壽子・清水友佳子・川村真由美・谷上真由美・木村啓章・村岡弥生

作業員：杉崎征夫・安藤美智子・山田優・鴨井そと子・島津イト子・八木美代子・谷尻小ちゑ・森川久男・森川加代子・安藤恵子・安藤恵利奈・中野勇雄・平野かすみ・岡本晴子・松田弘和・広瀬秀夫・橋本辰彦・山田ミンダ・伊藤文美枝・田中康民・野々村絃・西村真弓・八木まゆみ・西田和則・西田裕子・杉崎清彦

注3　B6地区検出の溝S D02や段状区画S X04などが礫によって埋め立てられていた。森島康雄・黒坪一樹・筒井崇史ほか「国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡平成16・17・18年度発掘調査報告　蔵垣内遺跡第4次・国分古墳群(Ⅱ)」(『京都府遺跡調査報告集』第134冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2009

注4　奈良時代の土師器・須恵器の器種名については奈良文化財研究所の分類名称を用いる。

小笠原好彦・西弘海・吉田恵二「土器」(『平城宮発掘調査報告VII 奈良国立文化財研究所学報』第26冊 奈良国立文化財研究所) 1976

神野恵「土器類」(『平城宮発掘調査報告XVI -兵部省地区の調査- 奈良文化財研究所学報』第70冊 奈良文化財研究所) 2005

注5　鉄磬の執筆に当たっては以下の文献を参考にした。

久保常晴「梵音具」(『新版考古学講座』第8巻 雄山閣) 1979

坂詰秀一『図録 歴史考古学の基礎知識』柏書房 1980

保坂三郎「けい 磬」(『国史大辞典』吉川弘文館) 1985

坂詰秀一編『仏教考古学事典』 2003

注6　石田茂作・三宅敏之「丹波国周山廃寺」(『考古学雑誌』第45巻2号 日本考古学会) 1959

注7　田代 弘「上安久城跡」(『京都府遺跡調査概報』第117冊 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2006

注8　中村孝之『木寺北遺跡発掘調査概報 綾部市文化財調査報告』第12集 綾部市教育委員会 1985

# 図 版

蔵垣内遺跡第12次 図版第1



(1) D2・E2地区全景(南から)

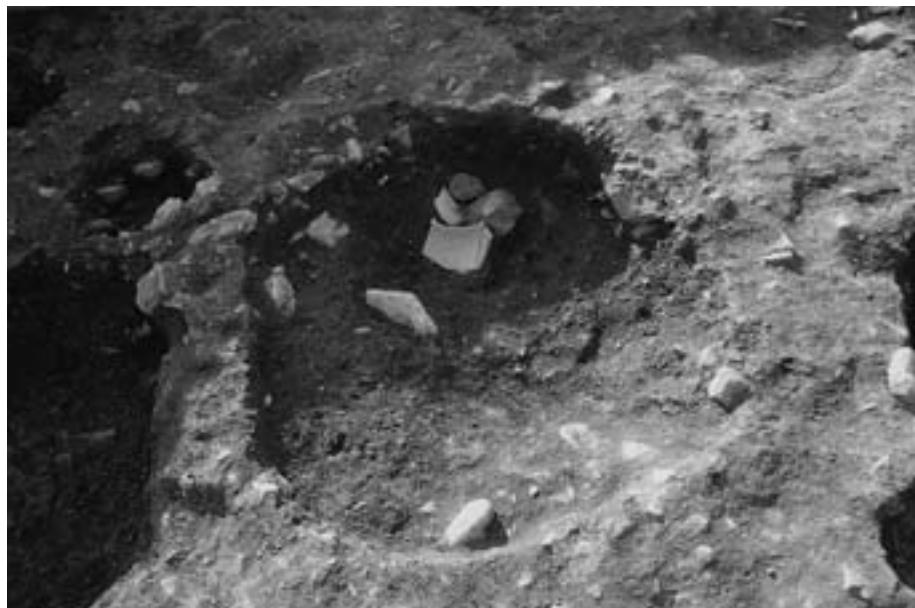


(2) D2・E2地区全景(東から)



(3) D2地区全景(北西から)

蔵垣内遺跡第12次 図版第2



(1) D 2 地区柱穴 S P 115  
遺物出土状況(北西から)



(2) E 2 地区全景(南から)

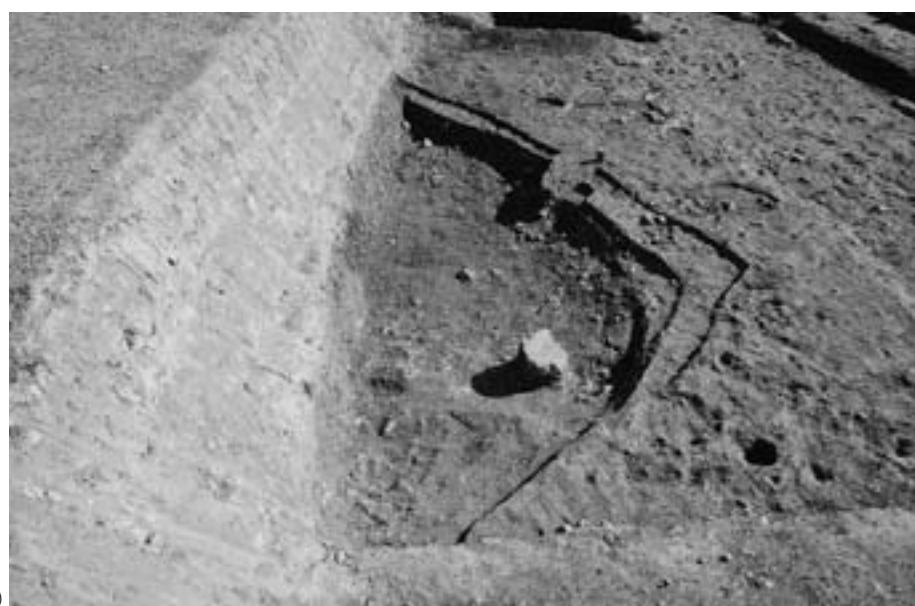


(3) E 2 地区遺物出土状況(東から)

蔵垣内遺跡第12次 図版第3



(1) H地区全景(北から)



(2) H地区土坑SK01全景(西から)



(3) H地区土坑SK22全景(北から)

蔵垣内遺跡第12次 図版第4



(1) I 地区全景(南から)



(2) I 地区(南調査区)南半全景  
(北から)

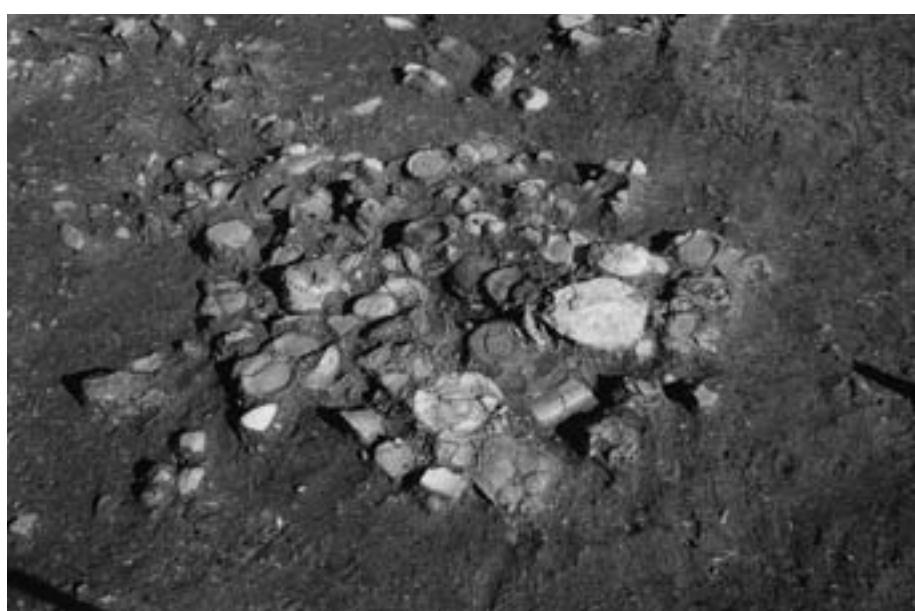


(3) I 地区(南調査区)北半全景  
(南から)

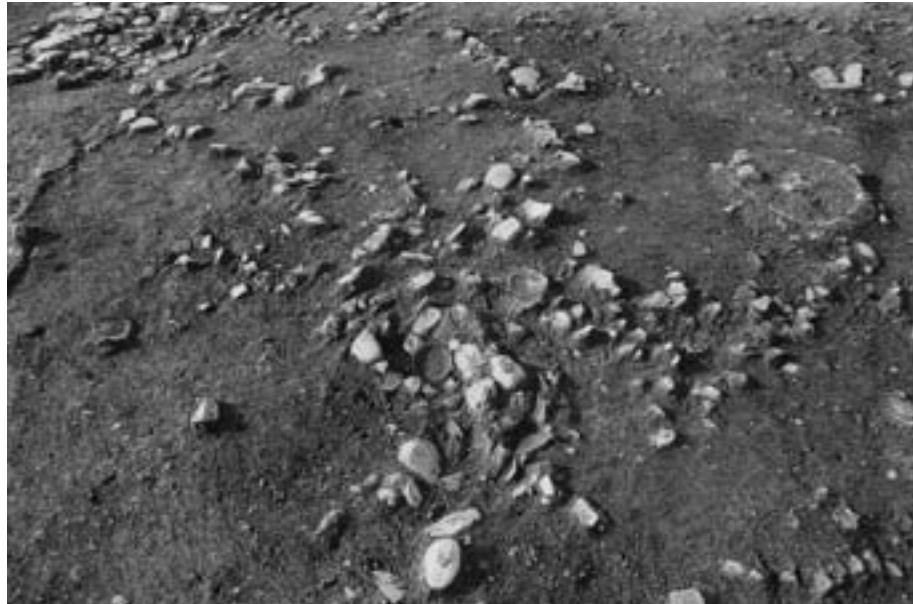
蔵垣内遺跡第12次 図版第5



蔵垣内遺跡第12次 図版第6



蔵垣内遺跡第12次 図版第7

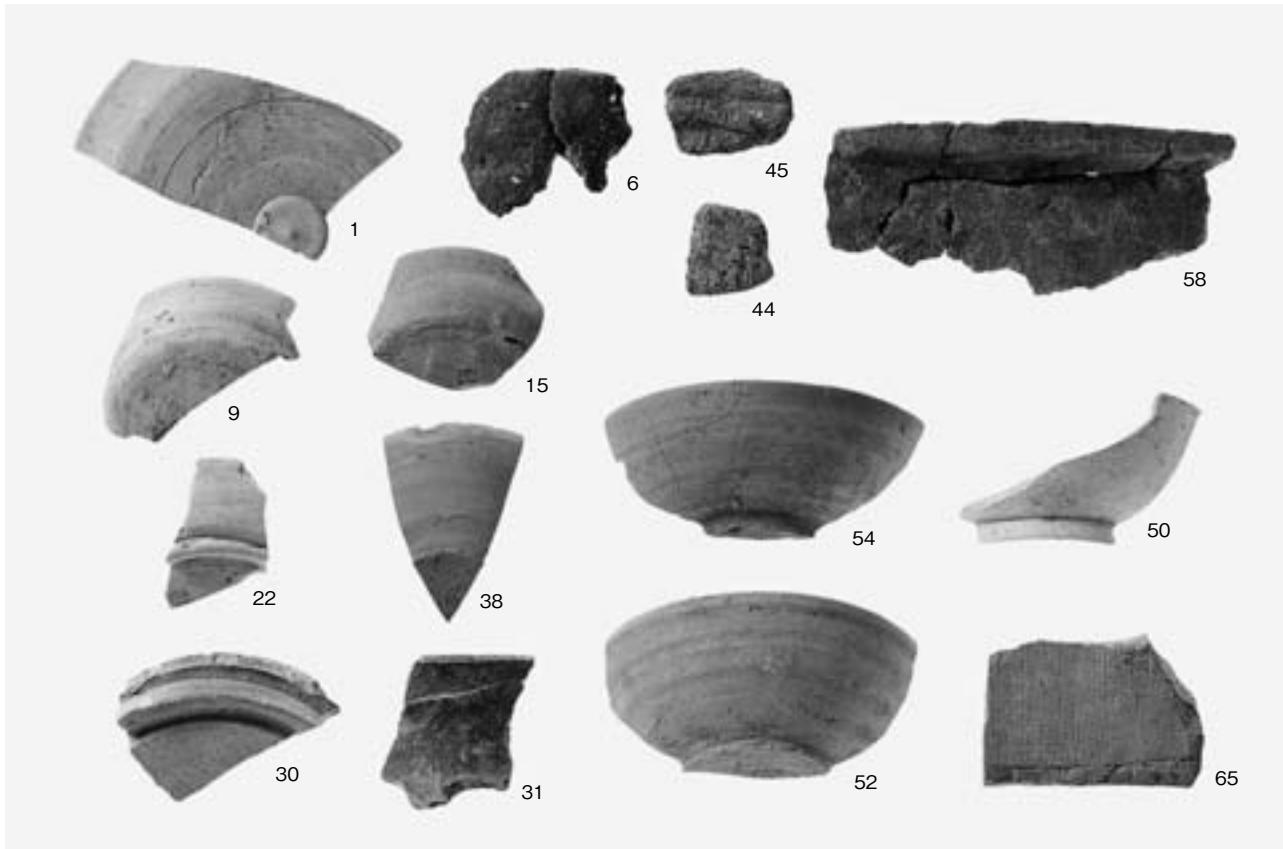


蔵垣内遺跡第12次 図版第8

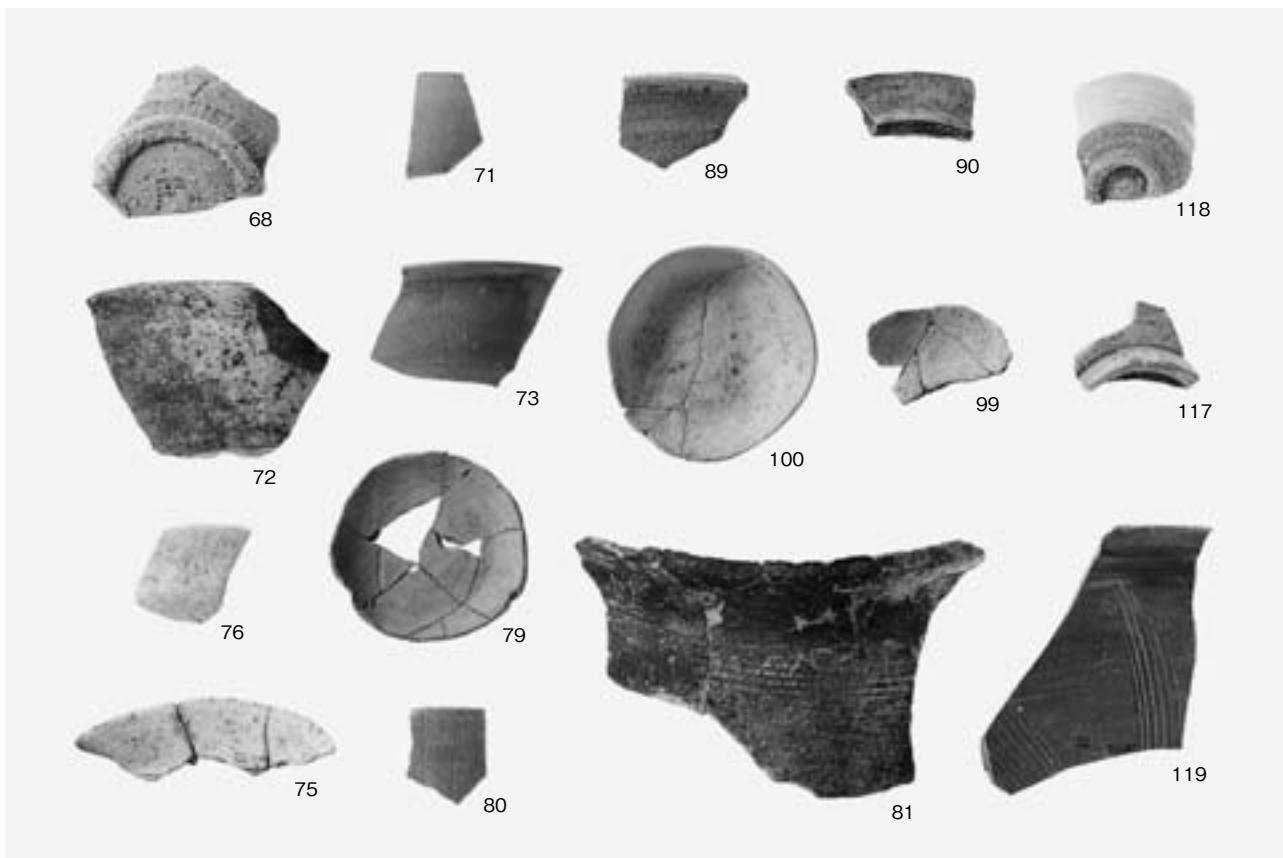


出土遺物 1

蔵垣内遺跡第12次 図版第9

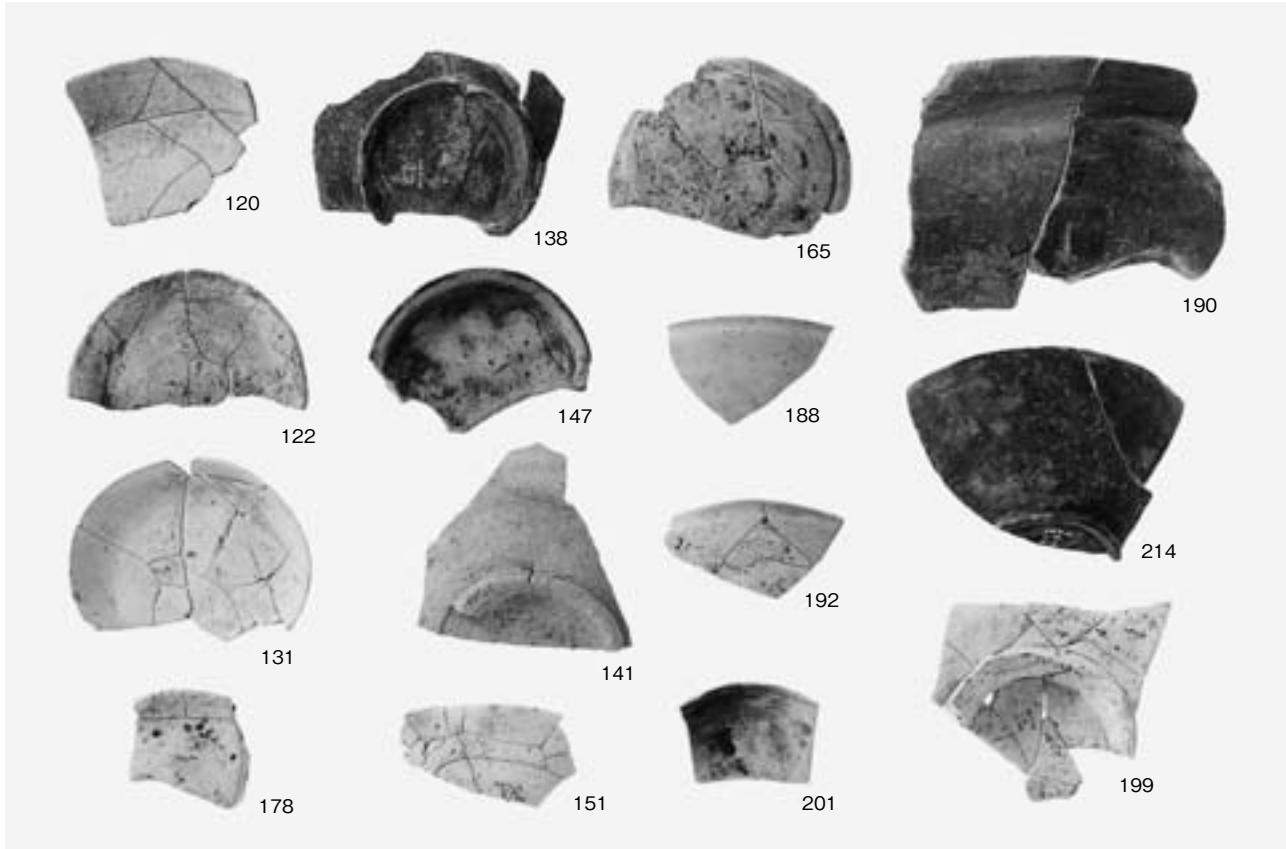


(1)出土遺物2

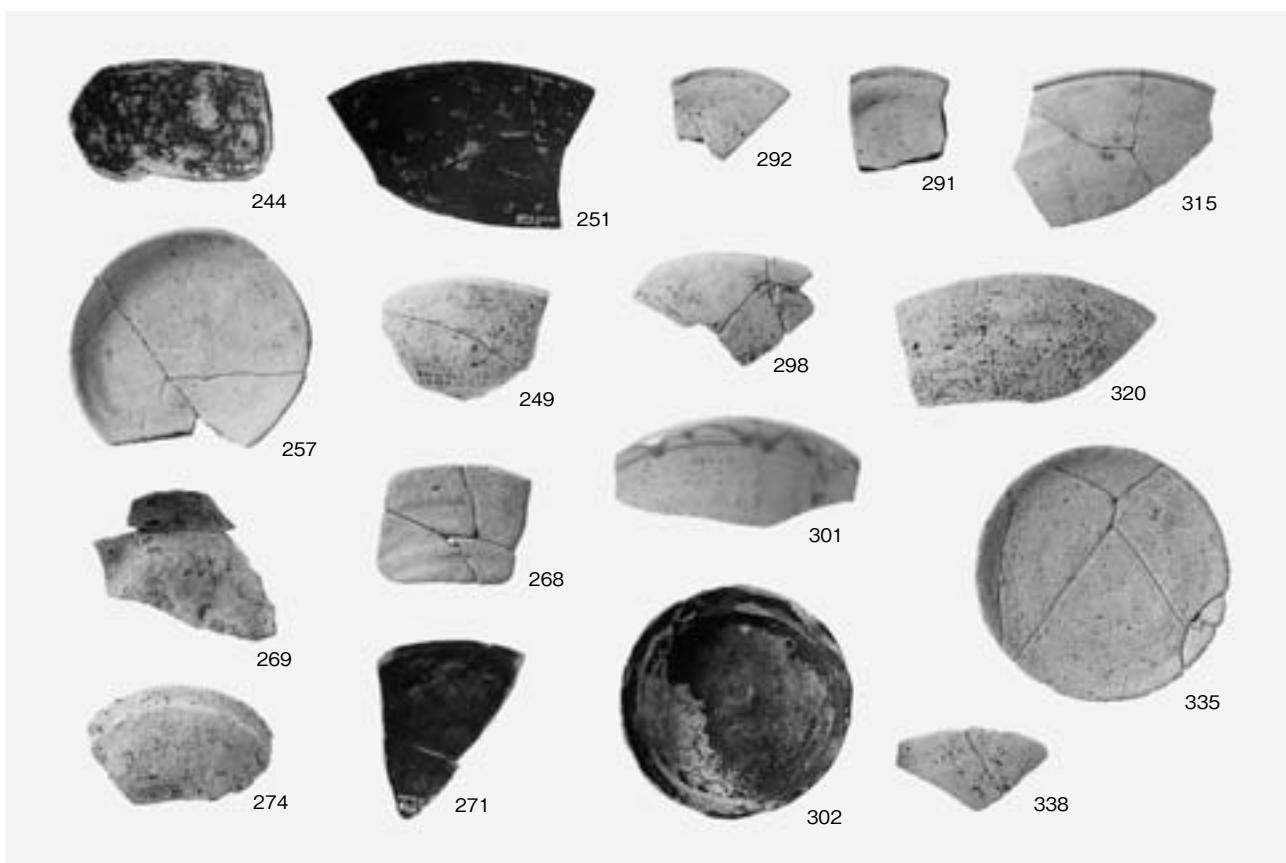


(2)出土遺物3

蔵垣内遺跡第12次 図版第10



(1)出土遺物4



(2)出土遺物5

## 京都府遺跡調査報告集 第141冊

平成22年3月31日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究  
センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3  
Tel (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189  
<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

印刷 三星商事印刷株式会社  
〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル  
Tel (075)256-0961(代) Fax (075)231-7141